

令和7年度 園評価書

園番号 37 園名 有度西こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている, C : あまりできていない, D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
「優しくたくましい子」	「安心して挑戦しようとする子」	やりたい遊びを見つけ、試したり、挑戦したりしながら遊んでいる	自分から好きな遊びを見つけて遊びだす姿が見られ、前日からの続きで「今日は、これで遊ぶんだ」という言葉も聞かれている。冬の遊びでは、どうしたら氷ができるかを考えて水を張ったバケツの置く場所や水の量なども考え、予想を立てて試すことを楽しんでた。年長児では、「風がふくと凍るのかな」などより思考を深める姿もあった。こま回しは、紐をまくところから始め、技の成功まで段階を経て、挑戦と達成感を繰り返していた。保育者は、子どもが自分で考えること、自分の体験から習得することを大切に、側で見守ることや肯定的な言葉かけを意識した。しかし、教材提供や環境の再構については難しさもあり課題が残る。	B	B	・保育者が子どもの思いを大切にしていることや思いを引き出して友達とつなげる工夫をしていることが伝わった	・子どもの「なんだろう」「おもしろそう」「やってみよう」という思いを肯定的に捉え、「どうしてかな」と保育者も一緒に考えたり、試したくなるような環境を整えたりし、興味・関心や挑戦しよとする気持ちを支える ・一人一人の思いや考えを保育者が丁寧に受けとめ、友達に思いに気付いたり自分の考えを発信したりする場を作る。必要により写真やタブレットなども活用しそれぞれの思いや考えを見える化していく。 ・各歳児の発達に合わせて、安全かつ挑戦が繰り返される環境や運動教材を工夫する。園庭では難しい思いきり走るなど難しさもあるが、広々とした近隣の公園などの資源も活用する
		自分の思いを伝えたり、相手の話を聞きながら遊ぶ経験を重ねている	引き続き保育者は、子ども一人一人の思いを肯定的に受けとめ、応答的に関わり自分の思いを表現し伝えることの喜びがもてるようにした。乳児組の子どもたちも安心できる保育者との関係の中でしぐさや表情、簡単な言葉で思いを伝えている。年齢により相手の話を聞きながら遊ぶことには差があるが、遊びや生活の中で自分の思いを出し、時には思いがぶつかることもあるが友達の思いを知る大切な機会と捉えている。年長児、後半の活動では、目的達成に向けて話し合いができてきている。	A	A	・異年齢でのリレーの中で、職員がそれぞれの役割を担って子どもに関わる姿があり、連携の様子が見て取れた。やはり、子どもを支えるためには、職員の連携や情報共有が必要だと感じる	
		思い切り体を動かして遊びながら、体を動かして遊ぶ楽しさを感じている	秋以降、子どもたちの動きが活発になり戸外で体を動かして遊ぶことが増えたため、縄跳びやフラフープ、一本下駄などを遊びに取り入れた。初めは上手くできずにいた子どもも保育者や友達と関わりながら「もっとできるようになりたい」と繰り返し挑戦し、自分の体を使いながらコツをつかみ、できた時には達成感を味わうことができた。年長児は午後の時間を活用し、ドッチボールを十分に楽しみ「投げる」「走る」「よける」など様々な動きを複合的にやっている。乳児期は、段差を歩く、ジャンプするなど体を動かして遊ぶ経験を積み重ねている。	A	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標					
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	遊びや生活を通して異年齢で関わり、年上児に憧れたり、年下児に優しく接したりする気持ちを育てる	中間評価から引き続き、散歩や園庭遊び、行事など日常的に異年齢での交流をもち、大きい子が小さい子に優しく接する姿が見られた。クリスマスには、年長児が『クリスマス大作戦』として作るものや、衣装、ソリで運ぶなど考え小さい子たちに手作りのプレゼントを配った。節分では、バリエーションや作戦を考え、小さい子を思いやる姿が見られた。職員間で活動のねらいや取り組みを共有することで、年長児は園の最年長としての思いをもち、小さい子たちは憧れや次は自分たちがという気持ちが芽生えている。	A	A	・0歳から6歳までの子どもたちが一緒に生活できる場所は、こども園の良さだろう。自然な形で異年齢で触れ合うことができ、その中で大きい子は小さい子に優しく接したり小さい子が年上児に憧れをもったりすることは、今の時代、家庭では経験できない大切なことであると感じる	年間を通して異年齢でのペア活動を楽しめるよう計画、実施する。職員での連携を密にし、ペア活動で見えた子どもの姿を伝えあう
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の成長や保育時間等を考慮し、安心して過ごせるようにしている	登園時の受け入れやコドモンでの連絡を通して、一人一人の健康状態や生活リズムについて保護者と連携をとり、発熱以外の全身症状(顔色、表情、元気、食欲など)にも留意して安心して過ごせるように活動を考えたり早めに休養をとったりしている。早番、遅番と長時間保育を必要とする子どもが多いため、職員での連携がとれるよう伝達漏れがないように伝達ボードに記入、口頭での共有もやっている。	A	A		長時間保育を利用していたり、外国籍で支援が必要な家庭もあるので、個々に合わせて丁寧な関わりをし子どもが安心して過ごせるようにする
	(3)環境を通して行う教育及び保育	身近な自然や素材に触れ、遊びに活用できるような環境を作っている	秋には、散歩に出かけ色とりどりの落ち葉に触れたりドングリなどの木の実を集め、年齢に合わせて落ち葉プールにしたり、制作やままごとの素材にしたりと遊びに取り入れながら身近な自然に触れてきた。冬には氷や霜など寒い季節ならではの自然現象に触れて遊べるよう、前日から水を張ったバケツやタライを準備したり日陰に水をまいたりし、子どもの実体験を広げた。実際に氷に触れ、冷たさや固さ、美しさなどを感じたり、年長児はどうやって氷ができるのかと考えたりする姿が見られた。	A	A	・減災教育については、子どもが家でも話をしてくれ、大人より防災意識が高いと思う。自分で自分の命を守るためにどうしたらいいかを考えるようになった	身近な自然の変化について保育者が感じ取る意識をもち、遊びにどのように取り入れていくかを会議で話し合い、具体化していく。
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	自分の身を自分で守ろうとする行動がとれるようにする	定期的に様々な想定で避難訓練や不審者訓練を行うことで子どもたちが自分で考え、行動する力を養っている。子どもたち自身がどこが危険でどこが安全か、どう逃げたらよいかを考えられるような機会をもち言葉かけを繰り返すことで子どもたちからどのようにして逃げたらよいか具体的に知るようになってきている。今年度は『ユレタ』を体験したり減災教育の研修に職員が参加したことにより減災への意識が高まっている。室内の危険箇所マップを作成し、一目見て危険箇所や安全なところがわかるようにした。今年度は減災教育の第一歩となったので、次年度も引き続き減災の観点をもとに訓練等取り組んでいく。	B	B	・先日、防災会議に参加したときに、災害発生から2日後、2週間後のことを考えることが必要という話を聞いてきた。被災後のこころのフォローについての研修も考えていく必要があると思うので、今後は、こども園でもそのあたりのことを視野に入れるとよいのではないかと	職員も子どもも減災の意識をもち、子どもたちが自分で身を守ることにつながる訓練を計画、実施する
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	食べることや健康へ興味関心をもち楽しく食べるようにしている	給食室と連携を取り、食育の集会でテーマにした食材がその日に給食で味わうようにしたことで子どもたちの中で食材への関心がもて、楽しく食べることに繋がった。保護者へ園での給食を知ってもらい、家庭でも子どもと食事について会話をしたり楽しい食卓つくりのきっかけとなるよう事務室前にレシピカードを掲示し持ち帰れるように用意した。	A	A		引き続き、食べることや健康について考えられるよう給食室や外部の方と連携しながら食育の取り組みを工夫していく。食育日よりやレシピカード掲示など家庭への発信を行う
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	支援が必要な子への関わり方や発達を知り、その子に合った活動内容や支援方法を工夫している	個別に作成した支援計画をもとに、少しずつ成功体験を積み重ねることで子どもたちの自信や意欲が感じられる。視覚的な支援や個別の声かけを行い、活動に見通しをもったり、苦手なことにも挑戦したりする姿が見られた。いちごの会(小集団活動)を年間8回実施し、安心して自己発揮できる場を設けた。いちごの会に担当者以外の職員も参加し実際の姿を共有し意見を出しあうことで理解を深めている。	A	A	・訓練のやり方を工夫し、大人も子どもも意識を高めていくこと、実際に体験することが求められるのではないかと	いちごの会の取り組み内容や参加については時期やねらいに合わせて考えていく。月反省の会議で支援児の姿と支援法を共有する
5 組織運営	(1)組織体制の充実	自身の分掌に責任をもって取り組んでいる	クリスマス、節分など分掌が中心となり、行事の企画・準備を進め円滑に運営できている。分掌ごとに責任をもって取り組んでいるが、リーダーの負担が大きい分掌もあった。リーダーからの発信だけでなく、自分事としてそれぞれの職員が声を掛け合い、主体的に取り組む意識ももてるよう、仕事の内容の確認や割り振りなど分掌での話し合いの機会をもち共有を図っていくと良いのではないかとと思う。	B	B	・給食のレシピは、とてもありがたい。家庭でも作ってみたところ野菜もよく食べていた。子どもとの会話のきっかけにもなっているので、他のメニューのレシピも掲示してほしい	年度初めに、各分掌で年間の見通しや自身の役割についても見直しをもつ。中間での会議をもち進捗状況を確認する
6 研修	(1)研修体制の充実	研修テーマに沿った手立てについて意識し、子どもの姿を共有しながら教育・保育を進めている	全学年公開保育を実施。研修テーマ『子どもがやりたい遊びを支える保育教諭の関わり』をもとに事前研では、3、4人のグループで遊びの様子の写真を使って子どもの発達や興味を捉えて話し合い、子どもの姿の共有と手立ての具体化を行った。子どものやりたい遊びを支えるためには、見守りや肯定的な声掛けが大切ということが学びとなり、教育・保育を行う上で、意識するようになった。	A	A	・感染症対策として換気と湿度を保つことが必要だが、設備の老朽化を考えると難しさがあるのではないかと。園でも出来るだけのこと、対策は行っていると思うが、行政に働きかけ連携して考えても良いのかもしれない	やってみよう遊びをする姿は見られているので、「もっとやってみよう」と思いが続くような保育者の関わりや環境作りについて考える
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	子どもの興味や関心に合わせ、子どもが試行錯誤できるような環境を整えている	保育者も子どもと一緒に遊ぶ中、子どもの興味や関心を捉えて環境を整えた。乳児では板と台で傾斜を作り、斜面を環境に取り入れると一歩一歩繰り返し登り誇らしい表情が見られた。各歳児で子どもの遊ぶ様子に合わせて環境を作っているが、遊びが途切れてしまったり扱いにくかったりすることもあり、発達に合わせた環境の再構成や教材選定については、引き続き吟味の必要がある。毎月後半の会議で翌月の遊び環境について乳児、幼児に分かれて環境図をもとに検討し、月の中盤で状況把握と改善の話し合いの機会を設け、園全体で環境を考えている。	B	B		保育者も一緒に遊びながら子どものこころの動きを読みとった関わりをする。また、子どもが新たな発想をしたり工夫したりするきっかけになるよう、保育者が教材研究を行い遊びのアイデアを増やしていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	日々の遊びや生活の様子伝え合い、子どもの育ちを保護者と共有できるよう努めている	コドモンの配信で日々の子どもの姿を伝え、誕生会や行事などの様子はドキュメンテーションを即日掲示している。掲示物を通して保護者と子どもの会話も聞かれ園での活動への関心が感じられる。1月に乳児組2月に幼児組の参加会を行い、スライドショーや懇談会、劇遊びを通して保護者と子どもたちの成長を共有する機会を設けている。	A	A	・就学が楽しみになってきている。小学校や近隣園との連携も子どもたちにとっては、就学にむけての安心材料になるだろう。感染症のこともあり今年度は予定が延期となったが良い取り組みだと思つので、続けていってほしい	タブレット配信、おたより、行事の掲示などを通して子どもの姿、保育のねらいや保育者の思いが伝わるように写真や内容を工夫する。口頭でのコミュニケーション、面談等を取り入れる
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣の園や小学校と交流の機会をもつようにし、連携を深めている	12月に行った年長公開保育に有度第二小学校の先生の参加があり、子どもたちの遊ぶ姿を通して園の教育・保育で大切にしていることを伝える機会となった。また、6月、2月に小学校参観に行き、卒園後の子どもの姿、成長を共有することができた。1月には年長児と有度二小1年生との交流を行い就学への期待がもてている。2月に年長児が近隣園との交流を予定していたが感染症の流行のため実施は先送りとなっている。次年度は交流の計画を早めに行っていきたい。	B	B		近隣園の公開保育や小学校の公開授業に参加し職員間での交流を進める。また、近隣園の年長児との交流をもち同じ小学校へ行く友達がいることでの期待感や安心感につながるようにする
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域との交流の機会をもち、子どもが地域に親しみを感じられるようにしていく	年間を通して、子育てトークの会やS型ディサービス訪問に出かけ地域との交流ができている。子どもたちは、自分より小さい乳児やお年寄りなど様々な人や園とは違った環境の中、地域の方とのふれあいやかわりを楽しみながら過ごしている。1月には『こま教室』を行い、地域の方にこまの回し方を教えていただいたり技を見せていただき、自分もやってみようと思い挑戦し、遊びが豊かになっている。毎月のお話の会では、子どもたちの中で絵本を読んでもらう楽しさや地域の方とのふれあいの暖かさや優しさを感じている。引き続き地域との交流の機会をもっていく。	A	A		引き続き地域の方々や交流の場を計画し、子どもたちに経験させたいことを意識して教育・保育の中に取り入れていく